The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

梁代の「行旅詩」—風景描寫を中心に—

佐伯雅宣

はじめに

梁代の詩には、しばしば旅の途上において、詩人が眼にした風景を詠った詩が見られる。これは六朝における山水詩の隆盛とも大きく關わっているであろう。小尾郊一先生は、梁・陳における山水詩の特徴の一つとして、「行旅の途中において、山水の美を詠じたもの」が多いことを指摘されている。①

また、この梁代に編纂された『文選』では、詩を「公讌」「贈答」など二十三類に分けて收めているが、そこには「行旅」の項目も立てられており、三十一題三十五首の詩が收められている。その詩題の數においては、「贈答」「雜詩」「樂府」についで多い。また、「志を言う」という點から考えると、より多くなるであろう「詠懷」や「哀傷」などは、前者は三題十九首、後者は九題十三首しか收められておらず、これらと比較しても、當時、「行旅」を主題とした詩がより重んぜられていたことが窺える。

そこでこのような六朝の「行旅詩」の流れを追いつつ、梁代の「行旅詩」の特徴について、特にその風景描寫を中心に檢討を加えたい。

一　古代の「行旅詩」—『詩經』・古詩—

そもそも旅の詩は古くからある。例えば、『詩經』や古詩には以下のような作品が見られる。

『詩經』豳風・東山

我徂東山　慆慆不歸
我來自東　零雨其濛
果臝之實　亦施于宇
伊威在室　蠨蛸在戶
町畽鹿場　熠燿宵行

我　東山に徂き　慆慆として歸らず
我　東自り來り　零雨　其れ濛たり
果臝の實　亦た宇に施す
伊威　室に在り　蠨蛸　戶に在り
町畽は鹿場　熠燿　宵に行く

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

不可畏也　　畏る可からざるなり
伊可懐也　　伊れ懐ふ可きなり

この詩では、出征して長い間歸ることができなかった兵士が、今ようやく歸れることになり、その途上において、故郷の様子を想像して詠じている。

『詩經』小雅・采薇

昔我往矣　　昔 我 往きしとき
楊柳依依　　楊柳 依依たり
今我來思　　今 我 來るに
雨雪霏霏　　雪雨(ふ)ること霏霏たり
行道遲遲　　道を行くこと遲遲として
載渴載飢　　載(すなは)ち渴え載ち飢う
我心傷悲　　我が心 傷悲するも
莫知我哀　　我が哀しみを知る莫し

この詩にもまた、出征した兵士が故郷へ歸ってくる途上の様子が詠われている。行程が遲々として進まず、飢渴して苦しみ、傷み悲しんでいるのだが、誰もこの哀しみを知る者はないと詠じている。

このように、『詩經』の中に見られる旅の詩では、主に出征・行役の苦しみ、または憂いや悲しみ、あるいは長い間離れていた故郷に對する思いなどが多く詠われている。

「古詩十九首」其一

行行重行行　　行き行きて重ねて行き行く
與君生別離　　君と生きて別離す
相去萬餘里　　相ひ去ること萬餘里
各在天一涯　　各おの天の一涯に在り
道路阻且長　　道路 阻しく且つ長し
會面安可知　　會面 安(いづく)んぞ知る可けんや
胡馬依北風　　胡馬 北風に依り
越鳥巢南枝　　越鳥 南枝に巣ふ
相去日已遠　　相ひ去ること日に已に遠く
衣帶日已緩　　衣帶 日に已に緩し
浮雲蔽白日　　浮雲 白日を蔽ひ
遊子不顧反　　遊子 顧反せず
思君令人老　　君を思へば人をして老いしむ
歲月忽已晩　　歲月 忽ち已に晩(く)る
棄捐勿復道　　棄捐せられて復た道(い)ふ勿けん
努力加餐飯　　努力して餐飯を加へよ

この「古詩十九首」其一は、解釋が諸説に分かれるものであるが[2]、今は旅先にある夫を思う妻の心情を詠ったものと解しておく。そしてそこに詠われるのは、旅によって離ればなれになった夫婦の別離の悲しみである。

このように古代から旅を詠った詩は多くあるが、これらでは、出征する兵士の苦しみ、故郷への思い、旅先に

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

いる夫を思う妻の憂い、別離の悲しみなどが非常に多く詠われている。つまり當時は、旅とは辛く苦しいものであるという認識の上に、このような詩が作られていたのである。

二　『文選』所收の「行旅詩」

さて一方、『文選』に收められる作品は、それまでの旅の詩とは多少趣を異にしている。『文選』の「行旅」の項は、晉の潘岳の「河陽縣作二首」と「在懷縣作二首」から始まっている。これらは潘岳が河陽縣や懷縣の令となった際に、その任地において作られたものであり、嚴密には旅の詩とは言えないかもしれない。しかし『文選』では、實際に「行旅」の項にこれらを收めている。ここから考えるに、六朝における旅の多くが官職について地方に赴任することであり、さらには地方官として任地にあって故郷や都から遠く離れていることから、詩人たちはその狀況を旅をしていると認識していたのではないだろうか。つまりはこれらも廣い意味で行旅の詩と見ることができるのである。

潘岳「在懷縣作二首」其一

南陸迎脩景　南陸　脩景を迎へ
朱明送末垂　朱明　末垂を送る
初伏啓新節　初伏　新節を啓き
隆暑方赫羲　隆暑　方に赫羲たり
朝想慶雲興　朝に慶雲の興るを想ひ
夕遲白日移　夕に白日の移るを遲つ
揮汗辭中宇　汗を揮ひて中宇を辭し
登城臨清池　城に登りて清池に臨む
涼飆自遠集　涼飆　遠き自り集り
輕襟隨風吹　輕襟　風に隨ひて吹かる
靈圃耀華果　靈圃　華果を耀かし
通衢列高椅　通衢　高椅を列す
瓜瓞蔓長苞　瓜瓞　長苞を蔓せ
薑芋紛廣畦　薑芋　廣畦に紛たり
稻栽肅仟仟　稻栽　肅として仟仟たり
黍苗何離離　黍苗　何ぞ離離たる
虛薄乏時用　虛薄にして時用に乏しく
位微名日卑　位は微にして名は日に卑し
驅役宰兩邑　驅役して兩邑に宰たるも
政績竟無施　政績　竟に施す無し
自我違京輦　我の京輦を違りし自り
四載迄于斯　四載　斯に迄る
器非廊廟姿　器は廊廟の姿に非ざれば
屢出固其宜　屢しば出づるも固より其れ宜なり
徒懷越鳥志　徒に越鳥の志を懷ひ
眷戀想南枝　眷戀して南枝を想ふ

この潘岳の詩は、任地である懷縣においての作で、ま

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ず周邊の風景を詠み、そこからそのような地にいる我が身を思い起こして、都へと思いを馳せている。

また同じく晉の陸機には、「赴洛二首」「赴洛道中作二首」などがある。

陸機「赴洛道中二首」其一

揔轡登長路　轡を揔りて長路に登り
嗚咽辭密親　嗚咽して密親を辭す
借問子何之　借問す　子　何にか之くと
世網嬰我身　世網　我が身に嬰ると
永嘆遵北渚　永嘆して北渚に遵ひ
遺思結南津　思を遺して南津に結ぶ
行行遂已遠　行き行きて遂に已に遠く
野途曠無人　野途　曠として人無し
山澤紛紆餘　山澤　紛として紆餘たり
林薄杳阡眠　林薄　杳として阡眠たり
虎嘯深谷底　虎は深谷の底に嘯き
雞鳴高樹巔　雞は高樹の巔に鳴く
哀風中夜流　哀風　中夜に流れ
孤獸更我前　孤獸　我が前を更たり
悲情觸物感　悲情　物に觸れて感じ
沈思鬱纏綿　沈思　鬱として纏綿たり
佇立望故鄉　佇立して故鄉を望み
顧影悽自憐　影を顧みて悽として自ら憐む

この陸機の詩においても、旅の途中の風景、山野の様子などを描寫しつつ、その上で別離の悲しみや故鄉への思いなどが詠われている。

つまり潘岳や陸機の頃になると、旅をしている作者自身が、その旅先や道中で眼にし、心ひかれた風景をそのまま詩の中に詠み込むようになるのである。[3] そしてそこから自己の感慨を述べていくのであるが、これもまた先の『詩經』や古詩とは多少異なり、旅そのものが辛く苦しいもの、あるいは困難なものであるという意識は必ずしも見られない。しかし旅が別離や孤獨といった憂いに結びつくものであるという點は、『詩經』や古詩とも一致している。『文選』の「行旅」の項の五臣・李周翰注にも、「言行客多憂、故作詩自慰」（言ふこころは、行客 憂ひ多く、故に詩を作りて自ら慰む）といい、旅には憂いが多いことからこれらの詩が作られたのだと述べている。

そして劉宋の謝靈運に至り、旅の途中眼にした風景の中でも、とりわけ山水の美を詠ずることが多くなる。[4]

謝靈運「七里瀨」

羈心積秋晨　羈心　秋晨に積る
晨積展遊眺　晨に積れば遊眺に展さんとす
孤客傷逝湍　孤客　逝湍に傷み
徒旅苦奔峭　徒旅　奔峭に苦しむ
石淺水潺湲　石淺くして水は潺湲たり

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

日落山照曜　日落ちて山は照曜す
荒林紛沃若　荒林　紛として沃若たり
哀禽相叫嘯　哀禽　相ひ叫嘯す
遭物悼遷斥　物に遭ひて遷斥を悼み
存期得要妙　期を存して要妙を得たり
既秉上皇心　既に上皇の心を秉り
豈屑末代誚　豈に末代の誚を屑みんや
目覩嚴子瀨　目に嚴子の瀨を覩
想屬任公釣　想は任公の釣に屬す
誰謂古今殊　誰か謂はん　古今殊なりと
異世可同調　世を異にするも調を同じくす可し

謝靈運「初去郡」

彭薛裁知恥　彭薛　裁かに恥を知り
貢公未遺榮　貢公　未だ榮を遺さず
或可優貪競　或いは貪競に優る可きも
豈足稱達生　豈に達生と稱するに足らんや
伊余秉微尚　伊れ余は微尚を秉り
拙訥謝浮名　拙訥にして浮名を謝す
廬園當棲巖　廬園を棲巖に當て
卑位代躬耕　卑位を躬耕に代ふ
顧己雖自許　己を顧みて自ら許すと雖も
心迹猶未并　心迹　猶ほ未だ并はず
無庸妨周任　庸無くして周任を妨ふも
有疾像長卿　疾有りて長卿に像たり
畢娶類尚子　畢娶　尚子に類し
薄遊似邴生　薄遊　邴生に似たり
恭承古人意　恭みて古人の意を承け
促裝反柴荊　裝を促して柴荊に反る
牽絲及元興　絲を牽くは元興に及ぶも
解龜在景平　龜を解くは景平に在り
負心二十載　心に負くこと二十載
於今廢將迎　今に於て將迎を廢す
理棹遄還期　棹を理めて還期を遄くし
遵渚鶩脩坰　渚に遵ひて脩坰に鶩す
遡溪終水涉　溪を遡りて終に水涉し
登嶺始山行　嶺に登りて始めて山行す
野曠沙岸淨　野　曠くして　沙岸　淨く
天高秋月明　天　高くして　秋月　明らかなり
憩石挹飛泉　石に憩ひて飛泉を挹み
攀林搴落英　林に攀ぢて落英を搴る
戰勝臞者肥　戰勝して臞者は肥え
鑒止流歸停　鑒止して流は停まるに歸す
卽是羲唐化　是の羲唐の化に卽して
獲我擊壤情　我が擊壤の情を獲たり

最初に擧げた謝靈運の「七里瀨」詩には、「羈心　秋晨に積る、晨に積れば遊眺に展ばさんとす」と言い、旅の愁いを「遊眺」（山水の美しい風景を觀賞すること）によって晴らそうとしていた樣子が窺える。この詩では

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

必ずしも實際に愁いが晴らされてるわけではないが、後に擧げた「初去郡」詩では、故郷へ歸ることができるという歡びから、「棹を理めて還期を遄くし、渚に遵ひて脩坰に騖す。溪を遡りて終に水涉し、嶺に登りて始めて山行す。野曠くして沙岸淨く、天高くして秋月明らかなり。石に憩ひて飛泉を挹み、林に攀ぢて落英を搴る」といい、山水の美しさを詠じている。

『文選』の「行旅」には、この謝靈運のあとに、同じく劉宋の顔延之から梁の沈約にいたる數名の詩人の詩が收められている。

沈約「早發定山詩」

夙齡愛遠壑　夙齡より遠壑を愛し
晚莅見奇山　晚莅に奇山を見る
標峰綵虹外　峰を綵虹の外に標げ
置嶺白雲閒　嶺を白雲の閒に置く
傾壁忽斜堅　傾壁　忽ち斜に堅ち
絶頂復孤圓　絶頂　復た孤り圓かなり
歸海流漫漫　海に歸せんとして流れは漫漫たり
出浦水濺濺　浦に出づれば水は濺濺たり
野棠開未落　野棠　開きて未だ落ちず
山櫻發欲然　山櫻　發して然えんと欲す
忘歸屬蘭杜　歸を忘れて蘭杜に屬き
懷祿寄芳荃　祿を懷ひて芳荃に寄す
眷言採三秀　眷みて言に三秀を採り
徘徊望九仙　徘徊して九仙を望む

例として沈約の「早發定山」を擧げたが、やはりこれらの詩においても、旅の途上の風景、その中でも山水の美が中心に詠ぜられている。やはり謝靈運以降の山水詩の流行を承けて、このような描寫が多くなっていったと考えられる。

以上が梁代にいたるまでの「行旅詩」の流れであるが、これらを踏まえて、梁代の「行旅詩」における特徴、とりわけ風景描寫に注目して見てみたい。

三　梁代の「行旅詩」に見られる風景

梁代の「行旅詩」の風景における大きな特徴としては、やはり江邊の風景描寫が多いという點が擧げられる。なかでも、遠くまで見渡す風景、またゆったりとした穩やかな川の流れ、そして夜の情景などが多く描かれている。このような描寫から、梁代の「行旅詩」に見られる風景は非常に清明で靜的なものであるという印象を受ける。以下その例をいくつか擧げておく。

謝朓「之宣城郡出新林浦向板橋詩」

天際識歸舟　天際に歸舟を識り
雲中辨江樹　雲中に江樹を辨つ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

謝朓「休沐重還丹陽道中詩」
雲端楚山見　雲端に楚山見え
林表吳岫微　林表に吳岫微かなり

范雲「之零陵郡次新亭詩」
江干遠樹浮　江干に遠樹浮び
天末孤煙起　天末に孤煙起る
江天自如合　江天　自ら合するが如く
煙樹還相似　煙樹　還た相ひ似たり

江淹「從征虜始安王道中」
山氣亘百里　山氣　百里に亘り
山色與雲平　山色　雲と平かなり
喬松日夜疎　喬松　日夜に疎にして
紅霞旦夕生　紅霞　旦夕に生ず

江淹「赤亭渚詩」
水夕潮波黑　水夕にして潮波黑く
日暮精氣紅　日暮れて精氣紅し
…
遠心何所類　遠心　何の類する所ぞ
雲邊有征鴻　雲邊に征鴻有り

沈約「泛永康江」
山光浮水至　山光　水に浮びて至り
春色犯寒來　春色　寒を犯して來る
臨睨信永矣　臨睨すれば信に永し
望美曖悠哉　美を望めば曖として悠なるかな

何遜「南還道中送贈劉諮議別詩」
天末靜波浪　天末に波浪靜かに
日際斂煙霞　日際に煙霞を斂む

何遜「春夕早泊和劉諮落日望水詩」
日暮江風靜　日暮れて江風靜かに
中川聞棹謳　中川に棹謳を聞く
草光天際合　草光　天際に合し
霞影水中浮　霞影　水中に浮ぶ

何遜「宿南洲浦詩」
違鄉已信次　鄉を違りて已に信次
江月初三五　江月　初めて三五なり
沈沈夜看流　沈沈として夜に流を看
淵淵朝聽鼓　淵淵として朝に鼓を聽く

吳均「至湘洲望南岳」
朧朧樹裏月　朧朧たり樹裏の月
飄飄水上雲　飄飄たり水上の雲

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

劉峻「自江州還入石頭」

鼓枻浮大川　枻を鼓して大川に浮び
延睇洛城觀　延睇す洛城觀
洛城何鬱鬱　洛城　何ぞ鬱鬱たる
杳與雲霄半　杳として雲霄と半ばなり

王僧孺「至牛渚憶魏少英」

楓林曖似畫　楓林　曖として畫くに似
沙岸淨如掃　沙岸　淨くして掃ふが如し
…
徘徊洞初月　徘徊して初月洞(とほ)り
浸淫潰春潦　浸淫して春潦潰(くず)る

劉孝綽「太子狀落日望水」

川平落日迴　川平かにして落日迴(はる)かに
落照滿川漲　落照　川漲に滿つ

劉孝綽「夕逗繁昌浦」

日入江風靜　日入りて江風靜かに
安波似未流　安波　未だ流れざるに似たり
岸廻知舳轉　岸廻りて舳の轉ずるを知り
解纜覺船浮　纜を解きて船の浮ぶを覺ゆ
暮煙生遠渚　暮煙　遠渚に生じ
夕鳥赴前洲　夕鳥　前洲に赴く

劉孝綽「月半夜泊鵲尾」

客行三五夜　客行す三五の夜
息棹隱中洲　棹を息め中洲に隱る
月光隨浪動　月光　浪に隨ひて動き
山影逐波流　山影　波を逐ひて流る

劉孝威「出新林詩」

霧罷前林見　霧罷みて前林見え
風息涌川平　風息みて涌川平かなり
坐觀暮潮落　坐に暮潮の落つるを觀
漸見夕煙生　漸く夕煙の生ずるを見る

簡文帝「經琵琶峽詩」

夕波照孤月　夕波　孤月に照り
山枝斂夜煙　山枝　夜煙を斂む

元帝「赴荊州泊三江口詩」

水際含天色　水際　天色を含み
虹光入浪浮　虹光　浪に入りて浮ぶ
…
榜歌殊未息　榜歌　殊に未だ息はず
於是泛安流　是に於て安流に泛ぶ

元帝「出江陵縣還詩二首」其二

遠村雲裏出　遠村　雲裏に出で

NII-Electronic Library Service

遙船天際歸　　遙船　天際に歸る

鮑泉「江上望月詩」

客行鉤始懸　　客行して　鉤　始めて懸り
此夜月將弦　　此の夜　月　將に弦ならんとす
川澄光自動　　川澄みて　光　自ら動き
流駛影難圓　　流駛せて　影　圓かなり難し

朱超「夜泊巴陵詩」

月夜**三江靜**　　月夜　三江靜かに
雲霧四邊收　　雲霧　四邊を收む

朱超「舟中望月詩」

大江闊千里　　大江　千里に闊く
孤舟無四鄰　　孤舟　四鄰無し
唯餘故樓月　　唯だ餘す故樓の月
遠近必隨人　　遠近　必ず人を隨ふ

※網掛―遠望のさま。
※**太字**―穏やかな川の様子。
※傍線―夕暮れや夜の風景。

まず遠望のさまは、すでに齊の謝朓などから見られるようになり、齊梁を通しての傾向と言えるであろう。特に「天～」、「雲～」、「遠～」などの語を用いて遠くの風景を描こうとしている點は特徴的である。そしてその中でも天のきわ、天のはてといった意味で「天際」、「天末」、「天邊」の語がしばしば用いられていることに氣づく。梁代より以前には、これらの語は以下のような例に見ることができる。

「古詩十九首」其一

相去萬餘里　　相ひ去ること萬餘里
各在天一涯　　各おの天の一涯に在り

陸機「擬蘭若生春陽」

引領望天末　　領を引きて天末を望む
譬彼向陽翹　　彼の陽に向ふ翹に譬ふ

このように「天のはて」といえば「天涯」という言葉が示すように、本來は離別や孤獨感と結びつく語であった。しかし齊梁代では、「行旅詩」の中に「天末」「天際」「天邊」といった語を用い、それによってより遠くの風景を描こうとしているのである。

また、穏やかで靜かな川の流れが「靜」「平」「安」といった語で表されているのも一つの特徴であろう。旅の途上における江邊の様子をこのように穏やかに描いたものは、それ以前にはあまり見られない。

謝靈運「富春渚」

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

遡流觸驚急　流に遡りて驚急に觸れ
臨圻阻參錯　圻に臨みて參錯に阻まる

鮑照「還都道中三首」其一

急流騰飛沫　急流　飛沫を騰げ
回風起江濆　回風　江濆に起る
孤獸啼夜侶　孤獸　夜侶に啼き
離鴻噪霜羣　離鴻　霜羣に噪ぐ
物哀心交横　物哀しくして心は交横し
聲切思紛紜　聲切にして思は紛紜たり

これらに見るように、むしろ梁より以前の「行旅詩」では、江邊の風景としては、激しい川の流れ、あるいは物寂しい様子などが多く描かれている。やはりこれは旅には憂いが多いという意識とも關連しているのではないだろうか。

そして夕暮れや夜の情景が多いというのも梁代の「行旅詩」の特徴であるが、そこに見られる風景にもまた、静かで清明な雰圍氣が漂っている。さらに何遜の「宿南洲浦」、「春夕早泊和劉諮落日望水」、劉孝綽の「夕逗繁昌浦」、「月半夜泊鵲尾」、梁元帝「赴荆州泊三江口詩」、朱超の「夜泊巴陵」などの詩題からもわかるように、夜に宿泊する際に詠まれているものがいくつか見られる。梁より以前には、夜の風景としては、謝靈運「夜發石關亭」や、謝朓「京路夜發」など、夜に旅立つことを詠うものはいくつか見られるが、夕暮れや夜に宿泊することを詩に詠うものはほとんど見られない。しかし梁代にいたって、先に擧げたような旅の途中に宿泊した際、その周邊、とりわけ江邊の風景を詠じた詩が見られるようになり、一つの特徴を示している。

そしてこの夜に泊まっている詩が多いこととも關連するかもしれないが、梁代の「行旅詩」では詩人自身が動いている様子はあまり見られない。

陸機「赴洛道中二首」其二

振策陟崇丘　策を振ひて崇丘に陟り
安轡遵平莽　轡を安じて平莽に遵ふ
夕息抱影寐　夕に息ひては影を抱きて寐ね
朝徂銜思往　朝に徂きては思を銜みて往く

謝靈運「初去郡」

理棹遄還期　棹を理めて還期を遄くし
遵渚鶩脩坰　渚に遵ひて脩坰に鶩す
遡溪終水涉　溪を遡りて終に水涉し
登嶺始山行　嶺に登りて始めて山行す。

顔延之「北使洛」

振楫發吳洲　楫を振ひて吳洲を發し
秣馬陵楚山　馬に秣ひて楚山を陵ぐ
塗出梁宋郊　塗は梁宋の郊に出で

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

道由周鄭閒　道は周鄭の閒に由る
前登陽城路　前みて陽城の路に登り
日夕望三川　日夕　三川を望む

このように梁以前の行旅の詩では、詩人自身が山に登り川を渡るなどして動いている様子がしばしば描かれている。[5] しかし梁代の「行旅詩」は、先に擧げた例をみても、詩人自身はほとんど動かず、その場に留まったまま眼の前の風景を詠じており、これは非常に對照的であるといえよう。

そして梁代の「行旅詩」では詩人自身の動きがないかわりに、周りの風景が動いていると描寫するものもある。

劉孝綽「夕逗繁昌浦」
日入江風靜　日入りて江風靜かに
安波似未流　安波　未だ流れざるに似たり
岸廻知舳轉　岸廻りて舳の轉ずるを知り
解纜覺船浮　纜を解きて船の浮ぶを覺ゆ

劉孝威「帆渡吉陽洲詩」
幸息榜人唱　幸ひに榜人の唱に息ひ
聊望高帆開　聊か高帆の開くを望む
聯村倏忽盡　聯村　倏忽として盡き
循汀俄頃回　循汀　俄頃にして回る
疑是傍洲退　疑ふらくは是れ傍洲の退きて
似覺前山來　前山の來るかと覺ゆるに似たり

劉孝儀「帆渡吉陽洲詩」
揚帆乘浪華　帆を揚げて浪華に乘り
操鼓要風力　鼓を操りて風力を要す
近樹儵而遐　近樹　儵として遐かに
遙山俄已逼　遙山　俄かに已に逼る

梁元帝「早發龍巢詩」
征人喜放溜　征人　放溜を喜び
曉發晨陽隈　曉に晨陽の隈を發す
初言前浦合　初め前浦の合するを言ひ
定覺近洲開　定めて近洲の開くを覺ゆ
不疑行舫動　行舫の動くを疑はず
唯看遠樹來　唯だ遠樹の來るを看る

例えば劉孝綽の「夕逗繁昌浦」詩では、靜かな川の流れに浮かんで情景を詠じているのだが、岸が廻るのを見てそれで舟が轉じていることを知るという。舟に乘っている自分が動いているにもかかわらず、自らが動いているという意識はなく、周りの景色が動くのを見て始めて自らが乘る舟が動いていることを知ると言うのである。

そして以下、劉孝威や劉孝儀、また梁元帝の「行旅詩」などを見ると、周りの樹々や山が近づいたり遠ざかったりするといい、作者が舟に乘って動いているのにもかか

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

わらず、周りの風景が動いていると表現しているのである。このような表現も、自らが山を歩き舟に乗るなどして動いてた梁以前の「行旅詩」には見られない新しい表現であると言えよう。

おわりに

六朝以前、古代では旅そのものが辛く苦しいものであるという認識の上に行旅の詩は作られており、行役の苦しみや別離の悲しみなどが中心に詠ぜられていた。そして晉の潘岳や陸機の頃になると、自らが旅先で眼にし、心ひかれた風景を詩の中に詠み込むようになる。そこには旅そのものが困難であるという意識はあまり見られないが、旅が憂いと結びつくものであるという點はそれ以前とほとんど變わっていない。劉宋の謝靈運に至って、道中で眼にした風景でも、とりわけ山水の美を愛で樂しみ、詩に詠ずるようになるが、それは旅の憂いを晴らすという目的もあったようである。そして謝靈運以降、このような行旅の詩が徐々に多くなっていく。

そして梁代の詩もまた、この謝靈運の影響からか、旅の途上で眼にした美しい山水をその中に詠み込んでいる。それらの詩には、遠くまで見渡す風景、穏やかな川の流れなどがしばしば描かれており、また時間帶としては、夕暮れや夜の情景が多い。特に旅の途上、夜に宿泊した際などに、その周邊の風景を詩の中に詠じているものが多く、梁代の「行旅詩」の一つの特徴であるといえる。おそらく梁代の詩人たちは、江邊の靜かで穏やかな風景を好み、そのような風景に適した時間帶として、夕暮れや夜を取り上げ、詩に詠い込んでいたのではないかと思われる。

そしてさらにもう一つの特徴として、作者である詩人に動きがほとんど見られないという點が擧げられる。謝靈運などは、旅をしている作者自身が、山に登り舟に乘って動いている樣子が詠われ、そしてその中で眼にした美しい山水のさまが描かれている。一方、梁代の詩では夜に宿泊した詩が多いことも關連するのか、詩人自身はほとんど動いておらず、その場で留まって見た眼の前の風景を詠じているものが多い。そしてさらには詩人自身が舟に乘っているにもかかわらず、自らが動くのではなく、周りの風景が動いていると描寫しており、それまでには見られない新たな表現であると言えよう。

そしてこれら梁代の「行旅詩」における特徴のうちいくつかは、後世にも承け繼がれている。例えば、旅の途上、夕暮れや夜に宿泊した際、周邊の風景を詠じたような詩などは、唐代に入ると、非常に多く見られるようになる。

張繼「楓橋夜泊」

月落烏啼霜滿天　　月落ち烏啼きて　霜　天に滿つ
江楓漁火對愁眠　　江楓　漁火　愁眠に對す

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

姑蘇城外寒山寺　　姑蘇城外　寒山寺
夜半鐘聲到客船　　夜半の鐘聲　客船に到る

この張繼の詩などは、その代表と言えるが、唐代以降、このような「旅宿」、あるいは「旅夜」というものが、詩の主要なテーマとしてしばしば詠われるようになる。そしてその先驅けとなっていたのが、梁代のこれらの「行旅詩」であったと見ることができるのではないだろうか。つまりはこれは唐代の詩が、梁代の詩の影響を受けていたことを示す一つの資料として捉えることもできるであろう。今後はこのような点を課題としつつ、さらなる考察を進めていきたい。

（注）

① 小尾郊一『中國文學に現われた自然と自然觀』（岩波書店 一九六二）を參照。

② 花房英樹『文選（詩騷篇）四』（全釋漢文大系二十九 集英社 一九七四）の解説にも「作者の立場を、どうみるかについては、説を一にしない。從來の説にも、殘された妻が遠行の夫を思う立場をとったものとみる説、はじめから「胡馬依北風、越鳥巢南枝」までの八句、すなわち前段は遠行の夫の立場から、殘りの八句、すなわち後段は、とどまっている妻の立場から歌ったもの、とみる説があり、また別に、主君から放逐された臣が、遠行の地で歌ったもの、とする説もある」という。

③ 前野直彬監修・佐藤保著『中國古典詩聚花』九「行旅と邊塞」（小學館 一九八四）の解説に「望鄕と思慕が旅の詩の基本テーマであるとするならば、旅の道中の風物を寫し、それに觸發された情感をうたう紀行詩は、旅の詩の内容が一つ進展したものといえるだろう」とある。

④ これと關連して、『文選』の「遊覽」の部にも謝靈運の詩が最も多く採られており、この中には行旅の詩と見ることもできる詩が幾つかある。前掲『中國古典詩聚花』の解説には、『文選』卷二十二の「遊覽」に收める作品はほとんど小旅行の中で山水自然をうたうもので、特には「山水詩」ともいわれるが、これらもまた廣い意味では旅の詩である」という。この「遊覽」と「行旅」の關連性については、もう少し檢討する必要があろう。

⑤ この點の特に謝靈運について、松岡榮志氏は「凝視する眼、移動する身體―陶淵明と謝靈運における「風」をめぐって―」（『新しい漢字漢文教育』第三十四號 二〇〇二）の中で「陶淵明は立ち止まって見ているために、景色の物體は動いているのに對して、謝靈運は自身が絶えず移動しているために、景色は却って靜止しているのです」と指摘されている。

NII-Electronic Library Service